

# 風雲！ SHIRANAMI 5 (東濃弁バージョン)

前川泰信 作

キャスト

A	佐保	女子高生	演劇部員	部長	3年生	健忘症
B	美貴	女子高生	演劇部員	役者	3年生	脚本担当 歴女
C	明恵	女子高生	演劇部員	役者	2年生	実はGの彼女
D	典子	女子高生	演劇部員	役者	1年生	アニオタ
E	みなみ	女子高生	演劇部員	音響	3年生	お調子者
F	友香	女子高生	演劇部員	照明	3年生	
G	阿部谷光雄	男子高生			2年生	
H	志緒理	女子高生	だまされて演劇部員		2年生	
I	葵	女子高生	Hの中学時代からの友人		2年生	うそつき
その他	適宜	J、M				

幕開け。舞台は後ろにひな壇が横切っており、床にはいくつかの箱状のものが配されている。

ME。ホリゾントをバックに、壇上にシルエットの五人が後ろ向きに立っている。全員、透明のビニール傘を手にしている。歌舞伎風の「チョーン」という拍子木の音がするたびに、一人ずつ振り返ってポーズを決めていく(見得を切る)。五人目が振り返るタイミングで、そのシルエットがぱったりと前に倒れる。四人が慌てて、そこに駆け寄ると同時に地明かりが点く。五人目と見えたものは、紙に書いた書き割りである。

- A ちよつとー。
- B ちゃんと固定しとかな。
- C 書き割りつてばれちゃうやん。
- D おかしいなー。重り付けてあるんやけど。
- C しっかりしてよ、もー。
- D でも、部長、これ(書き割りを示して)入れること自体に無理がないですか？
- A まーねー。
- D ちよつと脚本考え直しません？
- B えー、またその話？
- A これでいくってなったやん。
- C でもやっぱ、人数足りないのは…。
- D どうしても五人やないとだめですか？
- B だめ！

調光室の窓が開いて

F 何で中断しとんの？

- A やっぱり無理かなーって。  
F 何が？  
A 五人要るのに、役者が四人しかおらんってこと。  
F こないだ、その話したやん。  
B やっぱさー、友香こっちにいた方がよくない？  
F じゃ、照明誰がやんの？  
B そうだけど。  
D あー、照明と音響一緒にできたらなー。  
E ちよつと何い。

Fが顔をひっこめる。Eが音響卓から、つかつかと歩いて、舞台上にやってきながら。

- E それ、スタッフ馬鹿にした発言？  
D 違います違います。  
A 誤解やって、みなみ。  
E こっち来てやってみてん。音響照明同時にできるかどうか。  
A 分かったって。怒らんで。  
D そうそう。部員が六人しかないのが問題なんですから。  
A おいっ！  
C 典子、「しか」つつった？ 「六人しか」って。  
E 「カクカクしかじか四角いムーブ」（腰を振って歌い踊る）  
B 腰、ひわい。  
D 「しか」がどうかしました？  
A 「も」やら、「も」！  
E 「スモモも桃も桃の内」（同じ節で歌い踊る）  
B いちいち踊んな。戻れ、みなみ。  
E はーい。

E、舞台を降りて、音響席に戻る。

- D どういうこと？  
A 今時、演劇部に六人おって、「しか」ってことはないっちゅうの。  
D あ、そうなんですか？  
B ほやね、二人とかあるもんね。  
A うちも四年前まで二人やったらしいし。  
D 人ごとじゃないですよ。  
C そう！ 先輩出ちゃったら、うちら二人になるし。  
B 今年は典子一人、去年は明恵一人か。  
A もうちよつと入ってほしかったなー。  
B いや、そもそも勧誘ってやったっけ？

- A 来る者は来る。来ない者は来ない。  
B その結果がこれなんやないの？  
D だいたい六人の劇部に、五人の芝居書きます？  
B 悪かったね！  
D そういう意味じゃなくって。  
A だから、私の脚本にしときゃあよかったのに。  
B あんたのつて…あれ？  
C あれはない！  
D ないない！  
A えー、なんでー？  
B だって、何あれ？  
A 卓球芝居。

上手からJとM、見えない卓球台を持ち込む。それを挟んでJとKが卓球を打ち合う。Mは審判。女Kのサ  
ーブでスタート。はじめはごくごくゆっくりラリーー。

- M 「ラ・ボール！」  
K 「ねえ。」  
J 「なに？」  
K 「昨日。」  
J 「うん。」  
K 「どこ行った。」  
J 「バイト。」  
K 「は？」  
J 「何？」  
K 「私さあ。」  
J 「うん。」  
K 「行ったよ。」  
J 「どこへ？」  
K 「お店。」

Jが思わずボールを受け損ねる。審判はスコアをめくる。ラリーーのテンポが少し上がる。

- M 「ワン・ゼロ」  
K 「いなかったよね？」  
J 「うーん。」  
K 「ねえなんで。」  
J 「あ？」  
K 「うそつくの？」  
J 「うそ？」

K 「うそじゃん。」  
J 「違うって!」  
K 「浮気してる?」

またJがボールを受け損ねる。審判はスコアをめくる。かなりスピードアップ。だんだん女は鋭くドライブがかかるようになり、男は防戦になる。

M 「ツー・ゼロ。」  
J 「してないって。」  
K 「してる。」  
J 「してない。」  
K 「携帯。」  
J 「携帯?」  
K 「見たんだ。」  
J 「おい!」  
K 「恵子って。」  
J 「ちよつと。」  
K 「誰?」  
J 「待て。」  
K 「誰!」

いきなり脇に立っていたLがJの脇に立ってダブルスになる。さらにスピードアップ。Kはガンガン打ち込み、Lもガンガン返す。男は呆然と見つめる。

L 「私よ。」  
K 「は?」  
L 「よろしく。」  
K 「てめーっ。」  
L 「何?」  
K 「泥棒!」  
L 「はっ。」  
K 「あばずれ!」  
L 「古っ。」  
K 「ばか。」  
L 「かば。」  
K 「ぶた。」  
L 「ぶぐ。」  
K 「はえ。」  
L 「ごきぶり。」  
K 「くらえ!」

L、さっと隣のJと入れ替わる。J、受け損ねてボールが高く上がる。以下、スローモーション。皆でその球筋を見上げる。落ちてきた球をKは思いきり叩きつける。

K 「ばかーっ！」

Kの打った球が、Jの顔面を直撃。ノックアウト。

M 「ゲームセット。」

LとMは見えない卓球台を持ち上げて去る。Kは肩で息をしながら倒れたJに近づき見下ろす。

A 見よ、この迫力！

B 何がしたいんだ？

A テンポのいい劇を作ってみました。

他 却下！

A えー。

B でもさあ。

A 何？

B もしやるんやったら、女子の役は明恵やね。

C どういう意味い？

B (意味ありげに笑って) へへ。経験豊富じゃないのー。

C 何ですかあ？

B だからー、阿部谷君。

C ええっ？

B よう一緒に帰るやん。

C ばっ、あれは家が近所で、幼馴染みっていうだけで。

D えー、じゃ、例えば、私が告ってもいいんですか？

C どうぞどうぞ。

D へえ。

C 何？

B ま、明恵からかうのもこれくらいにして…

C おいっ。

A やっぱ、美貴のでいくか。

D でも、人数不足。

A 美貴、ほかのアイデアないの？

C だいたいなんでこれ、傘持ってるんですか？

B 言わなかったっけ？ 「白波五人男」よ。前、説明せんかったっけ？ ほんつとに言つとらん？

A 私の記憶力をなめてもらっては困る。

D そんなすごいんですか？

- B たしかにすごい。
- A 一晩寝ると、前日の記憶はきれいさっぱり掃除される。
- D えーっ。
- A 完璧なイージー・リカバリー。
- D どうやって台詞覚えてんですか？
- A すべてアドリブ。
- D うそ。
- C ほんとなんだな、これが。
- B 野獣の勘と言っていいね。
- D 信じられない…。
- A というわけで、新鮮な気持ちで君の話を聞こうじゃないか。
- B 何でえらそうなの？ …歌舞伎よ、歌舞伎。
- C 出た、歴女。
- D 江戸時代オタク。
- B っていうかね…。
- F あのさー。
- A あ、何？
- F 話、進まんみたいやし、今日、これでいい？
- A あ、ごめん、おつかれー。
- D お疲れ様でしたー。
- F お疲れ。
- A …よし、セリフ入れていこっか。
- B え？
- A どうした？
- B 十秒で消えとる。
- A なんだっけ？
- B 「新鮮な気持ちで君の話を聞こうじゃないか。」
- A あー！
- B OK？
- A なつかしー。
- B もう思い出か。
- A 去る者日々に疎し。
- Bが怒って去ろうとするのを、皆で必死に引き留める。**
- A ごめんごめんごめん！
- B 佐保に話しても無駄！
- A 聞くから、全身全霊で聞くから。
- B ほんと？
- A ほんとほんと。

- B :あのね。
- A うん。
- B この脚本の元ネタは、歌舞伎の「白波五人男（しらなみごにんおとこ）」。
- C 白波？
- B 泥棒のことを、「白波」って言ったの、昔。
- C ふーん。
- D じゃ、「五人の盗賊の男」ってことですか？
- B そう。悪者が主人公のお話。ピカレスク・ロマンっていうの。
- D でも、なんで歌舞伎？
- B そこやて。
- C お、身乗り出した。
- B 私の地元って、地歌舞伎（じかぶき）の伝統があんの。
- C 地歌舞伎？
- B プロじゃなくて、地元の人が集まって歌舞伎やんの。
- C へええ。
- B 聞いたことない？
- D ないです。
- A うん。
- B えー、このへんって、全国的にも地歌舞伎が盛んな地域なんやに。
- A そうなんだ。
- B で、大人だけじゃなくて、子供もやるわけよ。
- C へえ。
- B 子供歌舞伎。
- A あ、もしかして、時々ニュースでやるやつ？ 子供が顔にペインティングして。
- B ペインティング…。
- C 私も見たことあるかも。
- B でしょ。で、地元の子はだいたい五・六年生の時に出演すんの。
- A じゃ、美貴も？
- B そう。私の出たのが「白波五人男」。「ぞく賊徒の首領しゅりょう日本駄衛門（にっぽんだえもん）」。
- A ふーん。
- D で？
- B すっごい拍手。おひねりとか飛んでくるんだよ。
- D おひねり？
- B 紙に小銭とかお菓子とかくるんだやつを、客席から投げんの。
- D へえ。
- B なんかね、私それまですっごい引っ込み思案な子やったけど、そういう偉そうな役やらせてもらって、地元のおじちゃんおばちゃんからものすごく褒めてもらって、なんかすっごい嬉しかったんやて。
- A なるほどねー。
- C で、それが今につながってると。
- B うん。そやと思う。

- C だから、思い入れがあつて、最後の舞台にやってみたいと。  
B うん。ごめんね、「わたくしごと」で。  
A それはいいけどさあ。  
D うん、私もやりたくなってきました。  
A でも、五人男なんやら？  
B そう。  
A 三人とかじゃだめ？  
B さっきの傘持つて並ぶところが一番かっこいいんやって。そこはどうしても五人。  
A こだわるねえ。  
D でも、実際問題無理ですよねえ。  
A やっぱあきらめるか…。  
B はー。…また無難に脚本集から探す？  
C あの。  
A ん？  
C うちって、なんかこんなふうに、ずうっとあきらめてきた気がしません？  
B あー。  
A たしかに。  
D あきらめてきた？  
A やりたいことはいっぱいあったけど、条件が合わなかったからねー。  
B チャンバラやりたい！  
C 着物がない…。  
A リアルな学園物！  
B 壁作るとか無理…。  
C 思い切り泣き叫びたい！  
A 近所の子供が怖がる…。  
D ゴムゴムのガトリングやりたい！  
他 問題外！  
A …いろいろあきらめてきたなー。  
B 妥協に妥協を重ねた演劇部生活…。  
C 私たち、なんのために演劇やってるんですか？  
A 本質突くなー。  
C 舞台の上なら何でも実現できるからやらないんですか？  
B あー、たしかに。  
A 「私はここにいる！」って実感したいよねー。  
C 先輩たちの劇って、これが最後ですよねえ。  
A うん。  
B だね。  
C なら、もうあきらめるのやめて、美貴さんががそんだけこだわってること、形にしません？  
B …明恵！  
A あんた、いい子だねえ！

- D 私も賛成です。
- B みんな！ ありがとう。
- A で、どうすんの？
- C 部員を増やす！
- A げ、今から？
- B 不可能でしょう。
- C ほら、そこですぐあきらめる！
- A あ、そっか…。
- B この思考パターンを変えないかんのやね。
- D じゃあ、どうします？
- B あー、そういえばそもそも部員募集ってちゃんとしたことないねー。
- A まあ、入ってきた人だけで仲良くやってきたからね。
- C じゃあ、もしかして、実はやりたいって子がいるかもしれない。
- A まあねえ。
- C 心あたりない？
- D うーん。
- A 心あたりはないけどさあ、
- B 何？
- A 顔の広い子はいるよ。一個下だけど。
- D おおっ。
- C その子なら、劇に向いてる子知ってるかも。
- B 聞いてみてくんない？
- A 分かった。たまには部長らしく動いてみる。
- B 頼んだ。

暗転して、Iだけにサス。そのサスにAが入ってくる。

- A 葵ちゃん、ひさしぶり。
- I ひさしぶり、佐保ちゃん。何、用事って？
- A あのさあ、頼みがあるんだけどさあ。
- I いいよ。
- A 葵ちゃんってさあ、顔広いやん。
- I そっかなー。
- A 広がって。でさあ、うち、今度やるお芝居で人が足りんの。五人欲しいのに、あと一人。
- I 役者がってこと？
- A うん。誰か心当たりない？ あ、それか、葵ちゃんが入ってくれてもいいんやけど。
- I えー、無理無理。
- A だよねー。
- I 役者ってさあ、どういう子がいいわけ？
- A まあ、そやねー、…本番近いからさあ、発声鍛えてる暇がないよね。

I つてことは、地声のでかい子？  
A うん。それだとありがたい。  
I ほかは？  
A んー、普通は恥ずかしいこと平気で出来る子？  
I あー、分かる。  
A それと、うちのカラーとして、ちよつとオタクがかつてると気が合うかも。  
I (嫌なものを思い出した声で) あー。  
A 何？  
I 今、ありありと頭に浮かんだ子がおるんやけどさあ。  
A え？ ほんと？ 誰々？

上手から「キーーーーーン」というでかい声が近づいてくる。袖から、Hが通学鞆をリュックに背負って、キヤップをかぶり、手をつばさのように広げ、舞台をノリノリで駆け過ぎていく。

A …あれ？  
I …うん。志緒理っていうんやけど…どう？  
A たしかに条件は完璧に満たしとるね。つてか、満たしすぎ？  
I やっぱりねー。やめとく？  
A いや！ とにかく時間がないから。  
I よし。じゃ、引き受けよつかな。  
A ありがとー。入ってくれるかな。  
I どうかなー。  
A えー。  
I 正直言うけどさー、普通はいきなり演劇部入るなんて、考えもせんよね。  
A だよねー。  
I でも、困ってるんだよね。  
A うん。  
I そーだなー。

間。

I よう分からんけど、佐保ちゃんたち、今度の劇ってすごい大事なんやよね。  
A うん。うちの最後の作品。  
I どおおおしても、成功させたい？  
A どおおおおおおしても。  
I …あのさ。  
A うん。  
I 男、用意できる？  
A は？  
I 男。

A 何いきなりきわどいことを。  
I や、そうじゃなくて、ちよつとしたエサにしよかと思って。  
A エサ？  
I あの子に気があるってことにして。  
A ええっ？  
I あの子、恋に恋するお年頃だから。  
A え、あの、は？ ええと、もしかしてだますってこと？  
I そうともいう。  
A それはー…。  
I どおとおおとおおとおおとおおとおおとおおとおおとおおしても、なんでしょ？  
A そこまで長かったっけ？  
I 部員の知り合いにおらん？  
A うち、男っ気ないからなー…、あ。  
I お？  
A そういえば明恵の幼馴染み。  
I あ、それでいい、いい。  
A それでいいって…。  
I その子から話通しといて。  
A どうやって？  
I なんとなーくでいいから。  
A え、ちよつと。

暗転と同時に、上下にサスが点く。上手にG、下手にC。二人、携帯でしゃべっている。

C というわけだから。  
G 何、エサって？  
C いや、よく分かんないけどさ。  
G なんで？！  
C 部長が細かいこと忘れたって。  
G じゃ、引き受けんなよ、勝手に！  
C 光雄。  
G ああ。  
C 私の言うこと何でも聞いてくれるって言わんかったっけ？ あの時。  
G 言ったけどさ。  
C じゃ、頼んだ。

下手、Cのサス消える。

G おいっ！

上手、Gのサス消える。同時に、中央の大きなサス点く。喫茶店らしく、二人で座っている。

I こないだ、バイト先に中学の卒アル持ってたのよ。

H げ。卒業アルバム？ うちの？

I そう。

H ばか！ 見せんよ、葵。

I で、バイトの男の子集めて、うちのクラスのページ開いて。

H おい！

I 「合図したら、気に入った子を指さしてください！」

H 嫌ーっ！ なんでそんなことすんの！

I ごめん。

H も帰る。

I 待って待って。

H あん？

I したら…。

H 何？

I (黙って指さす)

H …は？

I (うなずく)

H まじ？

I うん。

H え？ ええええええええっ！

I ありえないっしょ？

H うん…って、おい！

I やー、びっくりしてさあ、是非お伝えしなくてはと。

H なになにに、どんな人お？

I 聞きたい？

H じらすなっ！

I 気の毒なくらい焦ってんね、志緒理。

H なりふりかまっとれるか！

I もー、会話を楽しもうよ会話を。

H 余裕ない余裕ない！

I しょーがねーな。ええとね、こう、すらっとして。

H おおっ！

I まーわりとイケメン？

H ぬおおおっ！ 性格は？

I 穏やかな方やない？ あ、いわゆる草食系？

H (叫ぶ) そーしょくけーっ！ 草食べるけーっ！

I 食べねーよ。

H 胃が丈夫ーっ！

I 話聞けよ。  
H ああっ！ 私はあなたのアスパラガス！  
I っつか、白菜？  
H あつあつの水炊きでどーぞっ！  
I …でさあ、志緒理。ここからが大事なんやけど。  
H 何々？  
I 彼の好み。  
H おー、それ最重要項目。  
I まずねえ、ちよつとオタクがかつてる感じがいいって。  
H おおおおおつ、どんとこいマニアック！  
I それからー、声が大きいの？  
H 名古屋の地下鉄でも愛を伝えられます！  
I あと、これは難しいんだけど。  
H 大丈夫、何でも合わせるから。  
I 演劇とかやっていると最高だなーって。  
H …は？  
I 演劇。  
H …なんで？  
I さあ、人の好みだから。  
H だめじゃん。私。  
I ところが！  
H は？  
I 私の知り合いに演劇部員がいて！  
H え？  
I ただいま、夏の大会出演者募集中！  
H ええっ？  
I 彼に話したら、是非応援したいと。  
H 応援！？  
I どう？  
H やります！  
I よし決まり！

中央サス消えると同時に、上下のサス。また、CとG。

G どういうことよ！  
C いや、どういうことって…。  
G 何？ 俺、レンタルされるってことか？  
C いやいや、光雄にTポイントは付かないでしょう。  
G 何言つとるんや！  
C ちよつと私も動揺しとって。

- G 断れよ！
- C いやー、ちょっと無理かなーって。
- G なんだ！
- C ちよつと前にさー、単なる幼馴染みって断言しちゃったから…。
- G はあ？
- C なんかないにくいんやわ、うち、男っ気ない感じだから。
- G だからって、おまえ…。
- C お願い！ 美貴さんの脚本、上演してあげたいんやって。
- G それとこれとは…。
- C 同じやって。どうしても一人足りんから、その子が要るんだって。
- G だまして入れて、何とも思わんのか。
- C いや、それはそうなんだけど。
- G じゃ、断れ。
- C 無理だって！
- G じゃ、俺が断る。
- C ちよつと、やめてやめて。
- G いいんか、おまえ。
- C 分かってよ。うちらにとつては、どうしても成功させたい芝居なんだって。
- G その子はどうなるんやて、それに俺は？ おまえは平気なんか？
- C 今度の脚本ね、すごくいいんだ。きつかけはどういうふうでも、演劇を経験できるってことはさ、その子にとつても絶対貴重だと思っただよ。最後にはよかったって思ってもらえるんやない？
- G …明らかに自分をごまかしてるだろ。
- C ごまかしてないって。ってか、私、一応女優じゃん。演技つてうそつくことだし。
- G 何開き直つとんの。俺は演劇部でもなんでもねーよ。
- C しょうがないやん、もう部長の友達つて子が言っちゃったんやで。
- G しょうがなくはないやら。
- C 光雄分かって。私、もうあきらめるの嫌なの。劇部の彼氏やら。蛙の子は蛙！ 餅は餅屋！ 演劇部員の彼氏だったら、演技しやあ！ 当たり前やん！
- G おい！
- C もしばれたら別れるでね！
- G おいっ！ (電話切れる) …無茶苦茶だな。

溶明。 Iと劇部ABCD、さらにGがそろっている。

- I そろそろ来ると思うんで、迎えに行つて来ます。
- B ちよつと待って。
- I はい？
- B これって、要するに、その子をだますってこと？
- I いやあ、そういう言い方すると、人聞き悪いんやけど。
- B いいの？ 友達なんやら？ それに阿部谷くんだけ？ こんなこと頼んでいいの？

- G いや、まあ…。
- C 気にしないでください。幼馴染みとして、今までいろいろ貸しがあるし。
- D へえ。
- B じゃあ、あとは、その子の気持ちだけど。
- A その子って、男子と付き合ったことあんの？
- I いや、彼氏いない歴イコール年齢みたいなの？
- D あー、それだますのってやっぱひどくない？
- I だましてるとは言い切れんのやないかな？
- D そう？
- I だって、私が言ったのは、「写真を見て気に入ったみたいだよ」ってだけで。
- B だましてんじゃん。
- I でも！ でもね。友達の紹介で知り合うっていくらでもあるやんねえ？
- A まあね。
- I 「あんた、彼の好みっぽいで会ってみやあ。」ってのと、どんだけ違う？
- A あ、そうか…。
- D そう言われるとねー。
- I でしょ？ 要は、会ってから当人同士がどうかってことやないの？
- A 「じゃあ、あとは若い二人に任せて。」
- D 「年寄りには退散しますか。」
- I そう、それぞれ。
- B そうかなあ。
- I そうだって！
- B そう？
- A そんな気もする。
- B えー？
- I それによ！ 会って話してる内に、光雄くんが本当に志緒理のことを…っていうパターンも。
- A あー。
- B そうかー？
- I したら、全て丸く収まって、みんな幸せ。
- B ない気がするけど。
- D どう思います？
- C ……。
- B 逆にさあ、志緒理ちゃんが「あれー、この人違うなー」ってこともない？
- 皆で、Gをじっくり見つめて。
- 皆 あー。
- G なんだよ！
- C まあ、たしかに。
- G は？

A でもそうになったら、メンバー探し直しことになるんじゃない？

I だから、そうなる前に、どんどん稽古進めちゃってよ。

B えー？

I 何？ どうしてもやりたい劇って佐保ちゃん言っとったよ。そんなに値打ちのない劇やったの？

B いや、はっきり言って自信作だけど。

I じゃあ、いいやん。

A うーん。

I 演劇部やら？ 舞台上にうそを作る部やないの？ うそでも何でも、あの子に夢を見せてやってよ。

B 詭弁だ…。

I あ、来た。

I、携帯を見て、下手に迎えに行く。Hと一緒に入ってくる。

I 紹介します。私の友達で上谷志緒理。（かみたにしおり）

H 志緒理です。よろしくお願いします。

皆 よろしくーっ。

G よろしく…。

H あ！ もしかして。

I そう、この前話した阿部谷光雄くん。

H、息を吞んで、Gを見つめる。ME。Gに狭いサス。Hの周りに大きなサス。上手から大天使M登場。バレーのステップを踏みながら、Hの周りを舞う。その中心で、Hは「ついに運命の相手に出会えた」という内容の歌を情感たっぷりに歌う。歌い終わりで、Gに駆け寄って抱きつこうとするが、いつのまにか間にCがいて、Hの顔に手のひらをつけ、おしとどめる。溶明。

C ちよーっと待って。

H ええっ？

C だいたいの話は、葵さんから聞いたるんやけど、プライベートは後回しにしてくれん？

H あ、ごめんなさい。

I そーだよねー。志緒理、演劇部の打ち合わせに来たんやでさー。

H すみません。つい目の前のことしか見えなくなっただけ。

A 気持ちちは分かるけど…。じゃあ、話をさせてもらっていいかな。

H はい。

A ざっと話を聞いて、やってもいいかどうか、早めに決めてほしいんやわ。うちらも時間ないもんで。分かりました。

I じゃ、ごめん。私、用事済ませてきていいかな。

H あ、いいよ。ありがとね。

I いいって。友達じゃん。じゃ、あとで。

H うん。

I、下手に去る。演劇部ら、あきれながら見送る。

A まず、活動は毎日3時30分から。

B 基本的には6時30分までだけど、だんだん形になってきたら、1時間の劇を通さなくちゃいけないから、夜遅くなることもあります。大丈夫？

H はい。

A 練習は体力トレーニングと発声練習で1時間。後は稽古ね。

H 発声って…。

A 口をハッキリ開けて声を出す。声は大きい方だよね。

H アルムおんじの家から、山の上のハイジが呼べます。

A は？

A ハイジっ！

D ペーターっ！

HとDは顔を見合わせる。にっこりうなずきあって。

H・D てーねんぴっ！

二人、がしっと手を取り合って。

H・D 同志！

C よかったねー、お互い仲間ができて。

A あと早口言葉とか。

C 寿限無とかも。

H ジュゲム？

A やってみせよっか。

皆で割り台詞にして、テンポ良くミュージカル風のふりをつけて、寿限無をやってみせる。

H …ラップ？

B 江戸時代にラップはないなー。

A 落語よ、落語。

H なんか呪文みたいで、覚えれんかもしれん。

G たしかに。

D ふっふっふ。

G 何？

D こんな日も来ようかと。

C どうした？

D 用意しておいたものがあるんです！

A 何？

D ハガレン寿限無。  
B はあ？

D セリムセリム お父（おとう）はブラッドレ（ー） ドクターマルコ（ー）の ライオンマン・ゴリラ  
ーマン・イノシシマン キンブリグリードリン皇子（おうじ） 逮捕逮捕逮捕だ マスタング マスタン  
グのホーエンハイム ホーエンハイムの アンテナピーンの「チビ言うなあ！」の アームストロングの  
姉上。

間。D、非常に得意げに周りを見回す。

A ……いつ作ったんだ。

G 今の何だ？

C オタクの暴走。

B 覚えようがないって。

C ねえ。

H ……ほとんどおぼまりました。

C は？

H 私、やっていけそうな気がします！

B なんで？

A なんか、重大な誤解が生じた気がする。

H よろしくお願いします。

B いいの？

H はい。（Dとがっしり握手して）これこそ私の求めていた環境！

C マニアの巣にはしたくないなー。

H それに、こんな人がずっと見守ってくれるし…。

H、Gに駆け寄って、腕をとり、

H 末永くよろしくお願いします。

G え？ あの…。

H （歌う）いつまで経ってもふたーりーは…。

C （かぶせる）ぶっちゃけあり得ない。

H え！

C あ、あれ？ えーと、そういう歌じゃなかったっけ？

H ……やだー、途中めちゃくちゃ抜けてるって。

C あ、そっか。ごめん。

H 昔のアニメだもんね。

そのやりとりを見ていて、皆、なんとなくCとGの関係に気づく。そこで雰囲気を取り繕おうと、

A じゃ、入部がめでたく決まったところで、作品の説明をお願い。

- B あゝ、オッケー。
- A ごめん、こちら時間ないんで、裏方の打ち合わせ進めとくね。
- B (心細そうに) 分かった。(みんな行ってしまいそうなので、Dを無理矢理引き留める。)

AとCは、下手後ろで、箱から小道具類や衣装を出して、検討を始める。Gは上手隅で携帯を見ている。

- B 元ネタは歌舞伎の「白波五人男」。
- H 歌舞伎。
- B 「青砥稿花紅彩画(あおとぞうしはなのにしきえ)」っていうのが本当の題名なんやけど。
- H はあゝ。
- A 蘊蓄は最小限にして。
- B ごめん、そやね。五人男っていうのは、みんな盗賊なわけ。で、みんなワケアリ。
- H ほう。
- B いろいろ手の込んだ詐欺のシーンがあったり、意外な人間関係が次々明らかになったり。
- D そりゃあねーだろーって突っ込みたい設定がいっぱい出てきますよね。
- B まあね。それでだまされる奴はいないだろう、とか。でも、名セリフ、名シーンの連続なのも確か。
- D はい。
- B で、最後に追い詰められて五人が勢揃いしてかっこつけるんやけど、逃げ延びることはできなくて、みんなやられてくって話。
- H なるほど。
- B で、これを現代版にしたのが今度の劇。舞台は高校。五人の女子高生の話なわけね。

以下、BがDとHに芝居の筋を説明しているのが小声で聞こえる中、AとCの会話。

- A いやー、明恵が言ってくれたおかげだねー。
- C 部長が頑張ったんじゃないですか。
- A どうかなく。そう言ってくれるとうれしいけど。
- C みんな言ってますよ。
- A なんかこう、初めて部長としての存在感？ みたいなのが出せた感じ。
- C グッジョブです。
- A 動いてみるもんやねー。
- C そうですね。
- A でも、どうなるかね、光雄さんと志緒理ちゃん。
- C まー、なるようにしかならないんじゃないですか？
- A 投げやりやねえ。
- C そうですか？
- A 明恵はほんとにええの？
- C 何が言いたいんですか？
- A いや、あのさあ。



D おつかれさまでしたー。

この間、Cはもはや我に返っているが、皆はHばかり見て、Cをがんじがらめにしたまま、必死で後ろに隠している。そして、にこやかにHを送り出す。H、下手に去る。見送り終わって、みんな、ほっとする。

C (押さえられてゆがんだ口のまま) もういいから、離して…。

A はいはい。

B 明恵。

C あ…。

B なんて言わない？

C え？ 何を？

B 何をつて…。

A ばればれじゃん。

I ちよっと、さっきのつてやっぱり？

B 何？ いつからつきあっとんの？

G …中二の文化祭の後から。

C 光雄！

D やっぱりー。

C ちがうつて！

A もういいつて。

I 佐保ちゃん、これどういうことよ？

A 知らなかったー。

I どうすんの？

B 明恵があんなに我を忘れるなんてねー。

A 光雄くん、愛されてるねー。

G いやー。

C 照れんな！

B うそつけん子やねー、演劇部なのに。

A それにひきかえ…

みんな、Iに注目する。

A あんた、すごいわ。

I いやーそれほどでも、つて何が？

G 天才的な嘘つき。

I ええっ？

G 「ありがとう。」

D 「いいつて。友達じゃん。」

A 全く曇りのない笑顔で言い切ったよね。

C あんたが演劇部入ってよ。

- I だめやって。私はうそなんかつけんって。
- G またそれを真顔で言うか？
- I もう、折り紙付きの正直者やし。
- D もういいから。
- B こんな人にのせられて、うちら、とんでもないことしちゃったね。
- C あきらめるよりはいい！
- D どーなんかなー…。
- A 明恵、なんで言わなかったの？
- C なんかないにくくって。
- B ばかじゃないの？
- A 光雄くんは？
- G 俺は明恵に、どうしてもやれって…。
- D どうして！
- C だから、みんなで確認したやん。やりたいことがやれな劇部じゃない、今度は絶対やるって。
- B うーん。
- G でも俺、二人きりになったら、絶対ごまかしきれん。
- A だよねー。どうする？ 絶対すぐばれるって思うけどね。

間。

- I 私が一肌脱ぎましょう！
- A 葵ちゃん！
- B いいの？
- I 乗りがかった船です。
- B でもどうすんの？
- I なんとか最後までごまかしきる。
- C できんの？ そんなこと。
- D …この人ならやれるかも。
- G たしかに…。
- I よし、私、明日から、ずっと来るね。
- B はりきってるのが、逆にやだ。
- I とにかく、私に任せて。
- A 大丈夫かなあ。
- G 人生、嘘つきに頼っていいのか？
- I 私の腕の、あ、みせどころ。 ↓ この台詞と次の「皆」、未確定。
- 皆 うーん…。

ME。練習が進んでいく様子を無言劇で示す。その間、Cの嫉妬をそれぞれがいろいろごまかしている様子も示す。

・不良役のBといじめられっ子役のH。その現場に先生役Cがやってくる。BをCが見つけて叱り始め、Hは退場。上手はじの箱に座っているGのもとに駆け寄る。Gがタオルを渡すと拭いてくれという仕草。しかたなくGが拭き始めると、Cが思わず詰め寄ってしまう。Hが振り向きびっくりすると、Cも我に返るが、自分の体勢に困ってしまう。慌ててIが駆け寄り、Hを無理矢理立たせて、後ろから操ってCとカンフーの対決をさせる。HがCを倒したところで、IがHに親指を立ててにっこり。Hは首を傾げる。

・A、B、C、D、Hが、お互いの思いを告白しているシーンを練習している横を、Iがうろろろしている時、CのかばんにGとおそろいの人形を発見。こっそりとそれを取り外し、袋に入れてGに渡し、練習が終わったところで、Hにプレゼントだと言って渡す。感激してHが受け取り、中身を見て、GとCがびっくりする。

・かばんを持って、HがGと一緒に帰ろうと誘っていると、白衣をマスクに身を固めたIが駆け込んできて、Hをつきとばし、Gの体温を計ったり、脈を取ったりして、大慌てで合図をすると、JとKが担架を持ってくる。衣装ケースのようなものにGを詰め込み、暴れるGを担架に乗せて走り去る。呆然と見送るH。

やがて、舞台上に、AとHが全員そろおう。

A じゃあ、そろそろ通し稽古いきます。

皆 よろしくお願いします。

B 今日、葵ちゃんは？

H 再試で遅れるって。

Hをのぞく一同、なんとなくホッとする。

B 志緒理ちゃん、ほんとに毎日よく頑張ってくれたね。

H ありがとうございます。楽しいです。

A そう言ってくれるとすごい嬉しい。

H なんかやりがい過ぎて、満腹って感じですよ。

B あ、じゃあ、もう恋愛のこととか入る余地なしだったり？

H いえ、彼氏は別腹です。

B …だよね。

A じゃ、まずスタッフ的なことをすりあわせしよっか。友香、照明の説明して。

F 分かった。何から始める？

A サスの位置かな。

F オッケー。

H サス？

F サスっていうのは、こう、上から丸く当たる光のことね。

H ああ、こういう。

F そうそう。床見てくれると分かるんやけど、前の1・2・3・4…

H ?

F 後ろの1・2・3・4、バミってあるやら。

H バミ？

F 位置を確認するためのテープ。

H ああ、これ。

F 第3場の立ち位置入ってくれる？ 暗転してるうちに、そこに立ってね。で、音入ったら、ハイッ、（指さすと、指された上手のサスが点く）、ハイッ（さらに指された下手のサスが点く）と、こんなタイミングで点くから。

みんな顔を見合わせて。

皆 ええっ？

皆、調光室を見上げて、

A 誰かおんの？

F おるわけないやん。

B じゃ、なんで今サス点いたの？

F え？ 私点けたけど。

D はあ？

C どうやって。

F だから、こうやって、ハイっ。（指された位置のサス点く）

G 何？何？

F 念力。

G 念力使えんの？

F わりと。

G わりと？

C サス以外には？

F ホリとか？

A ええっ、やってやって。

F 分かった。

F、中央でシコを踏んで、力を入れる。

F ふむ—————っ！

力が入るにつれて、照明が暗くなると共に、ホリの色が下からじわーっと赤くなっていく。しかし、カミすぎて、

F (こぼっ、こぼっ)ほっほ…。

Fが咳き込むのとリンクしてホリがどんどん青くなる。力尽きてうずくまる。

A 友香、大丈夫？

F ごめん。ホリは難しい。

A っつか、咳した時の方がインパクト強かったんやけど。

F やっぱ、ちゃんと上からやるわ。

B 分かった。

F、下手に去る。

D なんか、友香さんの背中に後光が見える。

A ほんとだ…。

皆、思わずFの背中を拝んでしまう。振り向くと、Eがいかに気づいて欲しそうに、わざとらしくアピールしている。

C 何？ みなみ。

E 照明ニ、負ケテハイラレマセン。

G は？

E 私モ、ココニイテ音ヲイレテミセマース。

G なんて外人になつてんの？

B 無理して対抗せんでええって。

E 大丈夫。第4場の別れのシーンどうぞ。

A ほんとー？

AとC、位置について演技を始める。サスが当たる中で、

A 恵子…。

C 真一…。

E (冬ソナのメロディを口で歌う。) チャラララン！ チャララララ、チャララララ、チャララララ…。

ゆっくり溶明。皆、ストップして見つめる中で、E、ノリノリで歌っているが、

A おい…。

E あれ？ いや続けて続けて。驚くのは分かるけど。

B あきれてんだよ！

G 念力でもなんでもねーよ。

C 歌っとするだけやん。

D 何、今の？

E 冬のソナタ。

C えーっ！

G (エロ詩吟) かと思ったよ。

A もういいから、普通にやっつて。

E いや、でも、念力使えるのはほんと！

B はいはい。

E 信じて！

A はい、行っ行って行って。

E、しづしづ音響席に戻る。

A ごめんねー。まともなのがおらんくて。

B あんたが言うか！

A え？ なんで？

B えー。忘れるやら、なんでも！

A え？ そうなの？

B …もういいよ。

A じゃ、通し始めます。

皆 はーい。

皆、それぞれ位置につき始めるが、

H あの…。

A 何？

H これからが大変なんですよね。

A そうだよ。

H ちよつとここらで気合いを入れたいなって。

B いいね。

H それで、あの…。

B どうした？

H なかなか一緒に帰ってくれないんで、ずっと聞けずにいたんやけど。

G !

H そろそろ、光雄くんの気持ち聞きたいかなって。

みんな、口の形だけで「あちゃー」とか「ついに来た」とか言う。1、ちよつと「のタイミングで下手から現れており、慌ててカバンから何かを出して」「そ」「そ」やっている。

H ねえ、どう思う、ここまで実際に会ってみて。

G え？ ん、まあ。

H だめなの？

G いや、だめっていうか…

I (大声で割って入る) あーのさー。

A あれ? 葵ちゃん。…いたっけ?

B いつ来た?

I 今今。

H 何?

I 初めに言ったけど、この子、草食系だからさー。

G え? そうなの?

I 面と向かって気持ち言うのって恥ずかしいんやよねー。

G そうなんや…。

I でね、手紙を書いたらしいんやって。

G えーっ?

H そうなの?

G あ、えっと…。

I (こっそりGのポケットに仕込み、取り出して) それがこれ!

H …見せて!

I 待った待った。せっかくなんやで、光雄くんの肉声で聞かな。

G えっ!

H 恥ずかしい…。

I だから、志緒理は、ここで座って、そうそうそっち向いて。目をつむって聞きましよう。

H うん。

I じゃ、光雄くんの朗読タイム、3・2・1・キュー!

G、封筒から手紙を出して固まる。心配そうに皆が近寄る。Gが手紙を示すと完全な白紙である。皆が頭を抱える。

B (こそこそと) なんちゆうことしてくれたの!

I だって、急やったし。時間稼がんと。

B じゃなんか思いついた?

I 頭真っ白!

B 行き当たりばったりのことすんな!

ひたすら困るG。きまづい沈黙が流れる。

H どうしたの?

思い切った様子で、AがGに駆け寄って、手紙を奪う。

A …ごめん! 読むのも恥ずかしいんやと! 代読で行くね。

B 表彰状かよ。

皆が息を呑んで見守る中、Aは深呼吸してからゆっくり情感たっぷりに読み始める。

A 「志緒理ちゃん。君の写真を卒アルで見た時、僕は『この子だ!』と思った。」

G おいっ。

B がんばれ、アドリブの女王!

A 「君のつぶらな瞳。小さくまとまった鼻。そして吸収力のありそうな唇。」

C 決して褒めとらんよね。

A 「その全てに僕は今夢中なんだ。ああ、僕はついに会ったんだ!」

H 光雄くん!

A 「志緒理・イズ・ビューティフル! 志緒理・イズ・ファンタスティック! 志緒理・イズ……エキセントリック!」

D たしかに。

G 英語は苦手なのか?

A 「神よ! 僕は今天国にいます! こんな出会いが人生に待っていたなんて! サンキュー、マイ・スイート・エンジェル!!!」

Aは決めポーズ。読み終わると同時に大袈裟なME。大天使再び登場。後ろにこぶりの羽を付けた天使もぞろぞろ登場。小天使たちが周りで手をひらひらさせている中、手を取り合って、ひとしきりダンスを踊る。

Aは自分の言葉に酔ってうっとりポーズを決めたまま。気づくと、Hは泣いている。Gも別の意味で泣いている。Hはついに号泣。

H しあわせだーっ!

I よかったねえ。

H うん!

I 光雄くん、今日は練習が終わったら、一緒に帰ってあげてね。

G えーっ、いやそれは…。

I 当然やら。

G やけど、ほら、通し稽古が終わったらずいぶん遅くなるし。

I だからこそやないの。

G いや、そんな時間なら、やっぱり、家の人の迎えやないと心配されるんやない…かな?

I もう、光雄くん、頭固いねー。

G 何言ってるんだ?

I もうカッチカチ。(耳打ち) 帰るまでに何か考えるから!

G 大丈夫か?

H 光雄くんを責めんといて!

G …。

H 光雄くんの今カチカチなのは、…別の所。

みんな引く。

H ね？  
G あ…、まあ。

C、つかつかと歩み寄ると、Gを音高くひっぱたく。

H ど、え？ 何すんの。

C 何が？

H ひっぱたいたやら。なんで！

C …うらやましいですよ。

間。

A えーつと、ごめん。時間ないから、通し始めていい…かな。

皆 (ぼらぼらに) …はい。

A じゃあ、照明と音響出だし確認。小道具、上下にちゃんとある？ それから…

Aのセリフを聞かせながら照明暗くなる。下手にサス。C、サスの中に入ってくる。つかつかと早足。サスを通り過ぎそうになった瞬間、Gが飛び込んできて引き留める。

G おい、待てよ。

C 何、私忙しいんやけど。

G 怒んなよ。

C 怒つとらん。

G 怒つとるやないか。

C 怒つとらん！

G …ふざけんなよ、やらせてるのはおまえらやろうが。

C ふざけとるのはどっちよ。あの子の前では…カチカチなんやら！

G えーっ！ いや、いやいやいや。

C 何？

G ちがうって、めっちゃめっちゃフニヤフニヤだって。

C はあ？

G いや！ じゃなくて、何言つとるんや、俺。

C もういい！

G おい！ 明恵！

溶明。EFをのぞくAとIがいる。

A じゃあ、昨日ダメ出したところを各自頭において、最後の場面の確認からやります。

皆 はい。

H あ…。

B …何？  
H 昨日、明恵、なんで光雄君たたいたの？

間。

H もしかして…。  
I 志緒理。  
H 葵。  
I 私も昨日はびっくりした。  
H やっぱり？  
I あの後、メールして確かめて分かったんやて。明恵ちゃんと光雄くんは、ただの幼馴染みやないって。  
C ちよつと！  
G まじか？  
H やっぱり！  
I 二人は…。

間。

I 忍者なの。  
H えええっ！  
G おい、何を？  
I もちろん、今時忍者なんていないよ。忍者の流れを汲んで、秘伝の技をいろいろと受け継いできた一族なんやと。二人とも子供の頃からそりやあ厳しい修行に耐えてきたらしいんやって。  
H なんか、そういうの聞いたことがある。  
I それこそ、歌舞伎の音羽屋とか、中村屋とかもね。  
C でしょ？ それで、二人はお互いに油断があったら、即座に攻撃をしかけなくちゃいかんの！ ね？  
…隙あり！  
G 明恵？  
H え？ でも「うらやましいから」って言わなかったっけ？  
I そりやそうよ。修行に明け暮れてきた内の一人が、あんなふうになつちやって。  
H そっか。…ごめんね、明恵。  
C ううん。掟（おきて）だから。  
G 掟？  
H でもなんで演劇部にいるの？  
I え…。  
C 他人になりますのは忍びの基本。  
I おおっ！  
G おい、明恵！  
H 流派は？  
I は？

- H そんな昔からの家柄なら、なんとか流ってあるんじゃないの？
- I ……
- D 飛天御剣（ひてんみつるぎ）流！
- H えーっ！ 「るろうに剣心」？
- D あれはアニメ。こっちは本物。
- H 感激。でも、典子がなんで知ってるの？
- D えーっと。
- I 典子がここに生きていられるのは、光雄くんのおかげなのよ。
- H え？ どうして？
- I この春に、不審者に襲われかけた典子のもとへ駆けつけて、やっつけてくれたのが光雄くん。
- H へえ！ やっぱ強いんだ。
- G いや、それほどでも…。
- D 光雄くんはねー、こーんな大きな刀をぶんぶん振り回す使い手なんやでね。
- G 待て！
- H 斬馬刀（ざんばとう）！
- G なんなんだ、そりゃ？
- D 知らんの？

ひとしきり、HとDはマニアックに盛り上がっている。その脇で。

- A （Bに）ねえ、今、どうなってんの？
- B あ、話の展開についていけない？
- A 次々に忘れていく！
- B じゃ、うかつにしゃべらんで。
- A 収拾つくの？
- B だから嘘つきに頼っちゃまずいって言ったのに。
- H じゃあさあ、二人の先祖ってどういう人？ すっごい活躍したとか？
- G 先祖って…。
- C ……ねえ…。
- B 時は慶安（けいあん）4年、將軍職が徳川家光から家綱に渡った頃！
- A 美貴？
- B 兵学者（へいがくしゃ）由井正雪（ゆいしょうせつ）と丸橋忠弥（まるばしちゅうや）を首謀者とし、美貴さん？
- B いわゆる慶安（けいあん）変が起こったが、その解決のため暗躍した者こそ、この二人の祖先！
- A 誰か止めて！
- B ここしか私の出番がない！
- A 出番って何？
- B 頼むからやらせて。
- A 時間がないから！

しづしがBは引っ込む。

I 事情は分かってくれた？ 志緒理。

H …たぶん。

C あ、でも志緒理。

H はい。

C 分かっていると思うけど、私たちの正体は秘密ね。

H もちろん！

A 収まったの？

B さあ？

A なんで納得した？

H、Gに駆け寄って。

H 光雄くん。

G うん。

H 私、今の話、ここ以外の人に絶対言わんでね。

G あ、すっごい助かる。

H これからは…。

G はい？

H 二人だけの秘密がいくらでも増えていくと思うけど…。

間。

G 志緒理！ ごめん！

H え？

C ちよっと、光雄。

G 明恵。俺、これ以上自分の気持ちに嘘はつけん。

I 光雄くん！

G 葵、やっぱ、俺無理だわ。

H 無理…。

G ごめん。どうしてもつきあえない事情があるから。

H やっぱり…。

H、くずれるようにうずくまる。皆、なすすべなく見つめる。I、Gを隔へひっぱって行って、

I 人の苦労を何だと思ってるの？

G ごめん。でも。

I 明恵の希望なんやら。男ならやりきりやあ。

G でも、もう言っちゃまったし。

I なんとかする！  
G は？  
I そのかわり、自分を全て捨てて！  
G おい、何を。

I が離れるのと入れ替わりに、他のメンバー（A・B・D）がGに近寄って説得を始める。I、ゆつくりとHに近寄って、肩に手を置いて。

I 志緒理。

H ……。

I ごめん！

H え？

I 私も知らなかったの。

H そうなの？

I 薄々感じるものはあったんやけどね。

H うん、私も。

I 許して。ちゃんと調べて話をすればよかったね。

H やっぱりそうなんだ。

I まさか、光雄くんがあんなふうやなんて。

H うん。

I ああいう禁欲的な世界に生きてるせいかもしれんね。

H え？

I 私もびっくりしたわ、光雄くんがこっち（カマ）の人やったなんて。

H …へ？

I 「気に入った」ってのが、同性としてだったなんてねー。

H あの、ちよつと…。

I 何？

H そうなの？

I え、どうしたの？

H こっちって、こっち？

I とてもそうは思えんけど、そう思ってみればなんとなくじみ出とるよね。

H ええっ？

I ええって、え？ 気づいてなかった？

H うん。

I え、じゃ、気が付いたって…

H 私はてつきり。

I 何。

H いやいや、それはいいんだけど。

I そうなの？

H あ、でも、あの手紙は？

I ああ、あれ。さすが演劇部部长だね。読み方に、妙に気持ちが入っちゃって。  
H どういうこと？

I 冷静に読んだら、あれ、素晴らしい友達に出会えたって内容やよ。

H そう？ そのわりに情熱的やなかった？

I こっちの人って、感情表現が豊かやん。誰にでも優しいし。

H うん。…へー、そうだったのかー。

H、立ち上がり、Gに近づく。説得をしていたメンバーも振り向く。

H 光雄くん。

G …うん。

H あの。

G ？

H 私、根本的に間違っと思ったみたい。

G いや、志緒理は被害者やら。

H そう言ってくれるんやね。やっぱり優しい。

G やっぱり？

H 私、知らんですいぶん光雄くんを苦しめたよね？

G ん、まあ。

H 秘密を人に言えんって、辛いことやね。

G 分かってくれる？

H 分かる！

G ありがとう。

H 私たち、恋人にはなれない運命なんやね。

G そうなんやって！

この間に、IがCに耳打ちをしている。聞いて驚いている。

H でもいい。私はずっと光雄くんの友達やから。

G え？ それでええの？

H うん。

G なんちゆう心の広い人なんや。

H だって、人は自分の気持ちに正直に生きるのが一番良いって。

G そうやな。

H だから、もう無理せんでええよ。本当の光雄くんのままに振る舞って。

G そうか！ ありがとう！

GはCに駆け寄ろうとする。それをCは押しとどめて、隅に連れて行く。その間に、Iが他のメンバーにも事情を告げていく。

G おい。良かったな！  
C 何が？  
G 聞いたろ。  
C 聞いた。  
G 思い切って言うてみるもんやな！。本当のおれたちに戻っていいってさ。  
C うん、あのね。  
G ああ。  
C 本当の光雄は、  
G ん？  
C 3分前から、こっちになったから。  
G …は？  
C この瞬間から、光雄はこっちの人として生きて。  
G なんて！？

G、振り向いて、皆を見る。皆はIを見る。Iはしれっと視線をそらす。Gがくっつかかろうとするが、

C やめて！  
G だって！  
C 頼むでやりきって。  
G おい！  
C ここまでいろいろ犠牲にしたんやで、無駄にせんで。  
G だからって！  
C 何でもやるって言ったやら！  
G ……。

G、周囲を見回すと、I以外のメンバーはとても気の毒そうにはしているが、助けてはくれなさそうなのを  
確認して、すべてを投げ捨ててカマッぽく、

G ありがとう、志緒理ちゃん！  
H ああつ、光雄くん。  
G 自分らしく生きるって、なんて素敵なことなの！  
H そうよ！ あなたは自由な小鳥。  
G ああ、私はどこまで飛んでいくのかしら…。  
H 素敵…。(涙ぐむ)  
B あの…、志緒理、こうなっちゃったけど、劇部続けてくれる？  
H もちろんです。もうここは私の居場所です。  
I 志緒理！  
H 私のやりたいことがやれるのはここ。  
C そうなの？  
H うん。たとえ…(うそでも)。

皆、はっとしてHを見る。Hはなるべく平気な顔をしようとしている。

A :最後の場面、確認します。

皆 はい…。

Iが拍子木を持って、打ち鳴らす。上下から黒衣が出てきて、傘を渡していく。AとDとH、ひな壇の後ろを向いて一列に並ぶ。一人ずつ振り向いて長台詞。

A 忘れっぽさなら日本一。九九もあやしきや、漢字もやばい。けれども演劇好きで、アドリブで全部乗り越える。嘘がほんとか、ほんとかが嘘か、虚実皮膜(きよじつひまく)の演劇部。みんなをまとめる  
石川佐保。

B 子供歌舞伎の思い出が今も私を駆り立てる。歴女歴女と私を呼ぶな。時代は今で場所はここ、私の生きるはこの瞬間。劇部を支える脚本家。冴え渡る筆、小野寺美貴。

C 心底尊敬する先輩、そのおしまいの大切な芝居のためなら彼氏も泣かす。寄せては返すジエラシーのビッグウエーブ乗り越えて、見事演じるこの舞台。先輩の鑑(かがみ)、松嶋明恵。

D つらぬくオタクバカ一代。二次元こそが我が世界。ひたすら入りたいアニメネタ。けれど一番愛するは、先輩と作るこの舞台。その場しのぎと笑わば笑え。唯一の一年、窪塚(くぼつか)典子。

H さておしまいはこの私。恋に恋する恋乙女。信じた恋に破れても、決して恨みはいたしません。きつと明日は花開く。それを信じてまた次の、恋を夢見る上谷(かみたに)志緒理。

A さあみんな！ いよいよ幕を下ろすよ！

皆 おう！

G、下手から登場。目のあたりに赤い隈取りが施されている。みな驚く。

G しばらく！ しばらくしばらくしばらく！

六方を踏んで登場。とてつもなくでかい刀を背負っている。

G ガキの頃から弱気なおれが、今度も女のいいように、手玉に取られたこの無念。怒鳴られ、脅され、ひっぱたかれ、挙げ句の果てがニューハーフ。こうなりやおれの存在感、示さないままおくものか。いざ尋常に勝負！勝負！

Iが下手袖から

I いやっ！ 日本一！

チヨーンという木の音が入ると、MEそれぞれに見栄を切りながら、殺陣が始まる。ややあって、Eがすたすたと舞台上に上がる。一瞬、皆が止まってそちらに注目する。すると、Eが手を空に向かってかざし、「んん」と力むと、緞帳が下り始める。皆、顔を見合わせて少し笑い、また殺陣を始める中、幕。

参考・引用

アニメ・漫画

宮崎駿ほか「アルプスの少女ハイジ」・牛山弘「鋼の錬金術師」・「るろうに剣心」

尾田栄一郎「ONE・PEACE」・鳥山明「Dr スランプ」・「二人はプリキュア」

歌舞伎

「白波五人男（青砥稿花紅彩画）」・「勸進帳」・「仮名手本忠臣蔵」・「暫」

演劇・舞台

三谷幸喜「君となら」 「バッドニュース・グッドタイムिंग」

フィリップ・ジャンテイ・カンパニー「世界の涯て」・ハリセンボンのコント

落語

「寿限無」・立川談春「明烏」

CM

ダイハツMOVE・日産